

令和4年度 きのくにコミュニティスクール座談会（和歌山市）

日 時：令和5年1月30日（月）13：30～15：30

会 場：和歌山市民図書館 2階 多目的室1

参加者：22名（教頭1名 学校運営協議会委員2名 図書館職員4名 読書ボランティア5名
家庭教育支援サポーター8名 市町村行政職員2名）

テーマ：家庭教育・読書活動を通じたCS

講 師：和歌山県CSマイスター 伊藤 松枝氏 上田 さとみ氏

1 ミニ講演「和歌山県CSマイスターに聞いてみたい10の質問」と交流



Q おはなし会のための場づくりの工夫とは？

A 伊藤氏 テーマというほどではないが、今日の中心を決めておく。例えば、保育所の子供たちが何をして遊んでいるか、どんなことがお気に入りか等。保育所の先生と話をすることでヒントをもらっている。とにかく自分が楽しく笑顔で、謙虚でありたいと思っている。

Q 家庭訪問をする時に大切にしていることは？

A 上田氏 訪問はつながりづくり。「保護者の話を聴く」ことを一番に、気持ちに寄り添う支援をいつも心がけている。また、家庭教育支援チーム「とらいあんぐる」では情報誌「すまいる」を発行している。各戸へお届けすれば訪問が自然な形になるし、「すまいる」の内容が会話のきっかけにもなる。

Q 活動を通じて感じていることは？

A 伊藤氏 26年前の「氷のような図書館」との対話、学校との連携の在り方、他のグループとの協議等、私にとって必要な経験ばかりだった中で、3つのことを実感している。

- ・「人には物語が必要」…私たちは自分の物語を紡いでいる当事者であること
- ・「物語を手渡す人の存在」…超高速社会の中、カタツムリの速度で絵本を開くこと
- ・「平和」…物語やカタツムリの実感も、平和であるからこそ叶えられえること

A 上田氏 保護者が困った時に頼ってもらえる存在でいたい。問題の改善はなかなか難しい。支援者は肩の力を抜いて、現状維持、今より悪くならないようにというぐらいの気持ちで保護者に寄り添うことが大切だと思っている。また、地域住民が支援員になって活動することで、地域の子供たちを見守ってくれていると実感している。「登校している時間帯なのに、〇〇ちゃんを通学路で見かけた。気になったので報告を。」等、タイムリーに連絡をもらうこともできている。

Q 2023年の願いや抱負は？

A 伊藤氏 読書は4つのH—「Humanity・Humility・Humor・Hope」。大人も子供も安心して居られる共有地、読書コミュニティを那智勝浦町でデザインしたい。

A 上田氏 情報や相談が入った時にどこにつなげるのか、つなげ先と連携しておかないと大切な情報と子供への支援が途切れてしまう。支援においては学校・地域・家庭そして行政のつながりが重要である。専門講座を受講し、活動したいと熱意を伝えてくれる方も多いため、家庭教育支援の活動がより広まってほしい。

2 参加者の感想（一部抜粋）

- ・思いを「かたち」に、つながりの大切さを再確認できました。様々な切り口や取組を知ることができるだけでなく、交流によって課題や問題を話し合い、共有できたことも有意義でした。できることを、できることから始めて、積み重ねたいと思います。
- ・伊藤さん、上田さんの経験からくる心に響くお話をありがとうございました。つながりの部分が和歌山市は広いこともあり、弱いと感じています。つくっていただけると嬉しいです。
- ・すばらしい活動と人格をお持ちの講師先生でした。私の居住する地域も、人口が多く、湯浅町や那智勝浦町のような小回りの利いた活動がしにくい中、行政規模も大きく福祉部門との連携も不十分と考えます。まずは他機関との協議を重ねることが大事だと思いました。
- ・おはなしボランティアで活動しているので、伊藤先生のお話は参考になりました。「かきかきいくつ」楽しかったです。今度使います。「くだもの」「おにぎり」に「手がでてくる」意味を初めて知りました。
- ・伊藤さん、上田さんお二人のCSマイスターのお話を聞かせていただきながら、和歌山市ではどんな支援が必要なのか、どんなことができるのか考えてみました。地域でみんなで子育てができるしくみをつくるため、和歌山市家庭教育支援サポーターとしてできることをしていきたいです。グループトークではとても良い時間を過ごさせていただきました。貴重な話を聞くことができたので、やはりいろんな話を伺わないといけないなと思いました。